

# ナシ黒斑病菌のイプロジオン剤に対する感受性

福島県果樹試験場

平成13年度試験研究成績書

## 1 部門名

果樹－ナシ－病害虫防除

分類コード 04-03-23000000

## 2 担当者

佐々木正剛・菅野英二

## 3 要旨

2000年と2001年、二十世紀において黒斑病による落果が多かったため、ナシ黒斑病菌に対するイプロジオン剤の耐性菌の出現実態を調査した。

- (1) 9月中旬に福島市内のナシ園12地点から罹病葉を採取し、1葉から1病斑を切り取り常法により組織分離し、杏寒天培地で25℃下で2～3日間培養した。イプロジオン剤希釈液(3.12～400ppmの2段階希釈法)を加用した検定用培地に、培養した菌叢を3mmの円盤に打ち抜き移植し、25℃48時間後の菌叢発育の有無により最少生育阻止濃度(MIC)を求めた。
- (2) 1988年、1989年の結果では、イプロジオン剤に対するMIC値のピークは3.12～6.25ppmにみられ、明らかに1峰性であり、感受性の劣る菌株は確認されなかったが、2001年の結果では、イプロジオン剤に対するMICの頻度分布は3.12ppm以下と400ppm以上の2峰性を示し、イプロジオン剤耐性菌と考えられるMIC100ppm以上の菌株が、339菌株中53菌株(17%)が確認された。
- (3) 12地点中10地点でイプロジオン剤耐性菌の発生が確認され、その出現率は3～50%とほ場間差がみられた。また、イプロジオン剤耐性菌比率の高いほ場が、必ずしも被害果率の高いほ場ではなかった。

以上のことから、近年の黒斑病の多発要因は耐性菌の出現によるとは必ずしも言えないが、耐性菌は1989年と比較して明らかに増加していることから、今後のイプロジオン剤の使用には十分注意する必要がある。なお、平成14年版農作物病害虫防除基準では、耐性菌比率の高いほ場ではイプロジオン剤加用有機銅剤に代えてシプロジニル剤を使用できるように改正された。

## 4 その他の資料等

なし